

2014/4/1

しろひげ@Kurobane です。

4月になりました。

今日を境に、季節は別れから出会いに移り、桜前線は北上への歩を速めます。

尾辻克彦というペンネームもち、サブカルチャーでも大活躍の赤瀬川原平は、なぜ日本人

はこの時季になると、決まって浮かれるのかを、

「花見は日本ならではの原始宗教である」（月刊「進歩人」）

と喝破しています。

お花見には経典もないし、礼拝堂もないし、神官や僧侶も牧師もないが、それゆえに

日本の国教であり、自分でも気がつかない宗教だ、というのが赤瀬川説です。

そうだったのかと納得し、自分のなかにムズムズとうごめく不安の正体がわかりました。

そして、「さくら」ということばを紐解くと、「さ」は清らかな、「くら」とは宿る、という意味をも

つそうで、語源的にも「さくら」は神が宿る木であったのです。

花見のときに酒を飲むのは、御神酒を媒体として死者と再会するためと、得心させられ

ます。

酔っていくうちに、冥途に行った肉親や友人の霊がおりてきて、ともに酒盛りをするので  
だとすれば、こんな豪華な遠忌はありません。

仏には桜の花をたてまつれわが後の世を人とぶらはば 西行

「桜だけを見て酒を飲まないのはただの美術鑑賞だけにとどまる」と赤瀬川さんはいっています。  
す。やはり酒が入ってこそ、美術を超えた宗教となり、法悦にひたることができるのです。

「ただお前は酒を飲みたいだけではないのか」

とのそしりを受けそうですが、ソメイ派（染井吉野の桜）、ヤマ派（山桜）、ヤエ派（八重桜）と節操なく宗派をわたり歩きながら、今年も桜の季節 – 季節と呼ぶにはあまりにも  
短い花の盛りの日々ですが – を楽しみましょう。

「わたしの宗教はお花見です」という、赤瀬川さんへの共感しつつも、あまり飲みすぎないように  
ご注意ください。

黒羽根整形外科

黒羽根 洋司